

思い出



歴史家ミリアム・シルババーグ - 出会いと「再会」

三宅義子

私が、ミリアム・シルババーグと初めて会ったのは1982年頃だったと思う。紹介してくれたのは、アメリカ人留学生たちの懇親会の席に加わったときに知り合った、シカゴ大学大学院で日本近代史を専攻するジャッキーという名の女性だった。同じ院生仲間で中野重治について博士論文を書くためにリサーチをしているミリアム・シルババーグはきっとあなたと話が合うから、と彼女は会うことを勧めた。後日、本人から電話がかかり、約束の場に現れたミリアムさんの颯爽とした姿はとても印象的だった。私より八歳ほど若い彼女の全身に活力がみなぎっていた。ここ10年ほどはミリアムさんとは音信不通になり、共通の友人たちから彼女の病状悪化を聞くだけになってしまったが、この時のミリアムさんの姿を思い出すたびに私には信じられない思いだった。

「颯爽」というのは若さゆえの容姿のことだけではない。何よりも印象づけられたのは彼女の鋭い知性だった。中野重治の奥さんの原泉さんとのインタビューや娘さんとの交流、そして大原社会問題研究所の客員研究員だった関係で法政大学の故藤田省三氏を指導教授(メンター) 役にして交わしたディスカッションなどについて話題はつきなかつたが、私が今でも忘れないのは、お互いの自己紹介的話しをしたあとで食事をする段になって彼女が言った次のような言葉だった。「今日ようやくフジタと山田盛太郎の『日本資本主義分析』を読み終えたので、祝杯をあげなきゃ」。「戦前の左翼青年たちは『分析』を理解するために枕にして寝た」という多分藤田氏から聞いたであろう言葉を付け加えるとき、その顔には伝説的な理論書を読破した高揚感がみなぎっていた。この言葉を通じて私は中野重治をマルクス主義の歴史のなかに位置づけようとしているミリアムさんの博士論文の構想の一端を理解したような気がしたものだ。

それは同時に、私自身にマルクス主義、戦前日本の知識人の歴史というものをきちんと考え直す必要性を認識させるうえで十分に刺激的な言葉でもあった。なぜなら、60年代半ば、日本マルクス主義の記念碑的業績とも言える<日本資本主義論争>の「講座派」の流れを汲む先生が多かった大学の経済学部で学んだ学生だったので、私の理解能力は別にして山田盛太郎の『日本資本主義分析』(1934年刊)は一度は目を通したものであったが、高度経済成長をへるなかで大きく変容した日本社会の現実とマルクス主義理論の不協和音は誰の目にも明らかでマルクス主義を過去の遺物として葬り去ろうとする論壇の主流に私自身も流されていたことは確かだからだ。ミリアムさんは、言葉の本来の意味で日本社会の近代化に果

たしたマルクス主義の役割を高く評価し、文化革命家としての中野重治の再評価をしようとしていたのである。日本社会がマルクス主義という過去の思想的遺産に目をそむけようとしているときに逆に欧米の大学でそれを再評価する研究が進んでいるとはなんと皮肉なことか。そのときすでにフェミニスト・スタディーズを勉強したいとアメリカの大学院進学準備をしていた私にとって、この夜のミリアムさんとの語らいはアメリカの大学での勉強に大きな期待をふくらませてくれるものとなった。

私のカリフォルニア大学大学院での勉強は1983年から始まるのだが、博士論文を書き終えて帰国するまでの八年間のあいだにミリアムさんとの親交は深まっていった。近代日本女性史の原点である繊維女工の歴史を階級・ジェンダーの交差点においてとらえ返した論考をミリアムさんは高く評価し、貴重なコメントをくれた。また、先にふれた山田盛太郎の『日本資本主義分析』を日本社会科学のジェンダー視点の欠如を示す例として取り上げた論文を書いたときも、ミリアムさんとのあのときの会話がなかったら、『分析』のことは青春期に通り過ぎた多くの本の一冊として忘却の彼方に追いやったまま思い出せなかったかもしれない★。

帰国してから私は地方に暮らすようになったために彼女の東京滞在中も何度か会う機会を逸したし、さらに、彼女の健康状態の悪化などもあってやがて音信不通になり、友人たちから深刻な病状を聞くだけになってしまった。そして彼女が逝ってしまった今になって私は、ミリアムさんと親しく交わった場面の一コマ、一コマを思い浮かべながら、私の留学生生活を支えたものはミリアムさんの励ましだったことに思い当たるのである。母語ではない言語で大学院生としての一定水準の論文を書いていくこと—これはたんに英語表現上の誤りを直し、文章を磨いてくれたというようなテクニカルな次元の問題ではなく、日本の歴史、女性史のことなど何も知らない人たちに理解してもらおう議論をどのようにつくってゆくかという問題なのだが、彼女の評価が私の努力のバネになったことは確かだ。彼女は中野重治論を *Changing Song* として1990年に上梓するが（邦訳『現代マルクス主義と中野重治』平凡社1998）、私の女工哀史論を「革新的」と「注」をつけて紹介しているのを見つけたときの喜びは今も忘れられない。

私が院生だった期間、ミリアムさんに誘われて、三つの学会・研究会でペーパー発表の機会をもった。ウェレズリー大学で開かれたBerkshire Women's History Conference とイタリアのベラージオで開催されたWomen in "Dark Times" Conference (歴史家クロディア・クーンツの企画で、第二次大戦下の日本、ドイツ、イタリア、中国の女性政策や動員の比較研究を目的としたもの)、アリゾナ州フェニックスで開かれた日本研究者ゲール・バーンステイーン主催の日本女性史のアンソロジー出版のための研究会 (Gail Bernstein ed., *Recreating Japanese Women: 1600-1945*, Berkley: University of California Press, 1991) である。ミリアムさんのテーマはいずれも「モダンガール」だった。中野重治論の刊行にこぎつけたあと、リサーチのなかで出会った『女人芸術』などを読み込むなかで次の仕事としてモダンガール論に着手していた。ちなみに、バーンステイーンの本のなかのミリアムさんの論考は"Modern Girl Goes Militant"である（これの姉妹編とも言うべき論考は「日本の女給はブルースを歌った」脇田晴子・S.B. ハンレー編『ジェンダーの日本史』下巻所収 東京大学出版会 1995）。

「モダンガール」というと私たちは、短髪で大胆に肌を露出したファッションを身にまと

い、モダンボーイとカップルで街角を闊歩する（銀ブラ）姿を思い浮かべるが、それを1920年代、30年代日本に開花した消費文化が生み出した風俗現象とみなすのが常だった。しかしミリアムさんは、これを関東大震災後モダニティに向かう日本社会の変容、とりわけ階級横断的な消費主体の形成という観点からとらえ返し、モダンガールの喫煙や自由恋愛を明治の良妻賢母規範からの新世代の離陸とみる。エロティックなイメージを強調するメディアや文学の表象によって「モボ」と並んで「モガ」のモダニティ推進力としての政治性など誰も省みなかったなかで、モダンガールとは誰かといえば、長期のストライキを戦う女工やこの期に生み出されてきた女給を含む「職業婦人」と呼ばれたさまざまな職種で働く女たちだったのだというのが彼女の論点である。だから、モダンガールは「モガ」ではなく「モダンガール」とフルネームで呼ばないかぎり歴史のなかで彼女たちが果たした役割を見失ってしまうのだ、と。

ミリアムさんが手探りでモダンガールの問題に手を染めてから30年近くが経った今、「モダンガール」研究は日本のジェンダー研究の分野で根を下ろし、東アジアの近代化を読み解くキーワードとしての地位を与えられている。その研究によると「モダンガール」という国境を越えた（トランスナショナル）女性の表象は中心である西洋から周縁部・アジアへという一方的流れではなく、相互浸透性のうちに形成されていることを確認するにいったという（2008年版『日本女性史大辞典』（吉川弘文館）の「モダンガール」の項目参照）。これはモダンガールを欧米の模倣ではなく、日本女性の固有の課題のなかから誕生したものともみたミリアムさんの論点の延長線上にあることは明らかである。

深刻な病気に苦しんでいたミリアムさんが長編のモダンガール論を脱稿した、と風の便りに聞いたのは数年前で、それがようやく2006年に*Erotic Grotesque Nonsense*として刊行の日の目を見たようだ（Berkeley: University of California Press）。私がそれを知ったのは2008年の始めで、A5変形判369ページに及ぶ大著を手にとったときは我がことのようにうれしかった。ミリアムさんはすでに大学も退職しており入院中だった。二月に入ると周囲では延命装置をはずすことも話し合われているというニュースが伝えられた。あの発刺としたミリアムさんがそんなことになってしまうとは！ 信じられない気持ちだったが、今となっては、せめて彼女が心血を注いだ著書を読むことしか私にはできない。それがせめてミリアムさんとの友情に報いることになるかもしれない、そう自分に言い聞かせながら私は何日もかけて読み通したのである。

「何日もかけて読み通した」と言うのは、重厚な中身のためだ。それは、日本資本主義の発展を背景に関東大震災以後開花してゆくマスカルチャーの意味を日本近代史のなかでとらえるためにミリアムさんが使用した膨大な資料と、彼女の解釈によって浮き彫りにされるモダニティのさまざまな局面を「モンタージュ」の手法によって提示することで読者自身に断片を統合しながら全体像の組み立てをゆだねるという本の構成の仕方からきているだろう。一方の極に議論の起承転結が一直線上に置かれた著作があるとすると（このことが本の質に関係しているという意味ではない）、ミリアムさんの本は多次的な叙述という意味で対極にあるからだ。この本では、章と章のテーマはストレートにはつながらず、また、章ごとに完結した分析が提示されているわけではないが、全章読み通して断片がつなぎ合わされることでその相互関係が理解され、著者の意図が見えてくるという仕掛けになっている。そのために、読者としてもそれなりのつきあい方をする覚悟が要求されるということである。そ

んなわけで日常業務に中断されながらも、私が、また本に戻り、最後まで投げ出さなかったのは、カルチュラル・ヒストリーを描くミリアムさんの論点がとても興味深かったからだ。やっぱりミリアムさんだ！—読みながら私は何度もそう思った。そこに映し出されていたのは、80年代に私がみた豊かな感受性と鋭い知性で物事の核心に迫っていく、あのミリアムさんの姿そのものだったから。

人びとがモダンを求め、実践した場所が五つあげられている—1)「モダンガール」が闊歩した銀座を始め、女工たちの戦鬨性があふれだした工場地帯の路地裏の道ばた、2)女給がエロティシズムを売り物にして働いたカフェ、3)ハリウッド・ファンタジーを伝播する場としての雑誌『映画の友』、4)変わりゆく夫婦の関係と生活の近代化が実践される家庭、そして5)民衆のレジャーランドとして賑わった浅草。これらを取り上げるなかで、モダニティを生きる人々の意識のありようが跡づけられるのだが、参照される資料は、先行研究は言うに及ばず、文学作品、映画、エロティシズムのジェスチャー、レビューガールの衣装、食べ物などにおよび、それらを読み解くミリアムさんはセンシティブで機知に富む。ユーモアのセンスに満ちた叙述は読む者を引きつけずにはおかない。階級を越えて初めて消費主体となったこの時代の人々が日常生活のなかで求めたモダニティへの鼓動は、まさに浅草のジャズホールや舞台上で演奏されるドラムの音と重なり、スピード感を伴ってページの間から立ち上がって来るようだ。そして該博な知識に裏付けられた彼女の分析は、明治の家族国家イデオロギーに育成された身体とは異なる身体性の出現を的確に描き出すのである。

さて、本のタイトルとして掲げられている「エロ・グロ・ナンセンス」であるが、この言葉は1920年代、30年代の大衆文化の低俗性を特徴づけるために使われてきたことはよく知られている。とりわけ、30年代になって軍国主義の台頭とともに抵抗の拠点を失った民衆が個人の快楽に逃避することで戦争に巻き込まれてゆくというような解釈が一般的だったと言える。ミリアムさんの解釈はこれに挑戦するもので、本書の内容を一言で要約すれば、「エロ・グロ・ナンセンス」—「エロ・グロ・ナンセンス」の中心はエロティシズムの追求と著者はみる—のマスカルチャーが何を表そうとしたのかを読み解く試みということになるか。新しいジェスチャー、新しいセクシュアリティ観や家族関係の変容、観客として「エロ・グロ・ナンセンス」文化を消費すること—これらに埋め込まれているのは、明治の家族国家イデオロギーからみずからを解き放ってゆく近代のエートスだった。もちろん、これが戦時体制の深化とともに消費主体としての民衆は天皇の臣民として再編成され、コスモポリタンの「エロ・グロ・ナンセンス」は非国民の快楽としてしりぞけられ、最終的には「鬼畜米英」のスローガンに置き換えられてゆくのである。

ここまで書いてきて私は、天皇の臣民であることに変わりはないにしても資本主義的商品の消費主体となって快楽を追求する民衆と、天皇の臣民として再編成され、帝国の野望に荷担してゆく民衆の経験の二重性を表すさいに、ミリアムさんが採用しているconsumer-subjectsという言葉に注目していることを付け加えたい。subjectsという言葉の意味の二重性—つまり、行為の主体者と絶対的權威に従う臣民という二重の属性。この言葉を通してミリアムさんは日本のマスカルチャーの歴史の特異性を語ろうとしたのかもしれない、と私は考えるからだ。

以上、ミリアムさんの究極的関心であるモダンガール論がマスカルチャーの歴史という射程のなかに位置づけられ、分析されていることをみてきたが、それにしてもこの力作を送

り出したミリアムさんに私は心から敬意を表したい。衰えゆく健康と死の予感のなかでよくぞ執筆に集中し、完成にまでこぎつけたものだと感嘆する。おかげで私はミリアムさんと再会できたことに感謝したい。

あなたが残した思索の跡をたどることで、私は、親交のあった80年代と同じような知的刺激を受け、豊かな時間を過ごすことができました、と。

<筆者あとがき>

本稿を書き出したとき、私のなかのミリアムさんの思い出を前置きとして書いて、本論では彼女の二冊の著作*Changing Song* と *Erotic Grotesque Nonsense* のなかでジェンダーの視点がどのような位置を占め、論点構成にいかなる役割を果たしているのかを検証する予定であった。しかし、私の健康上の問題もあって当初の計画をまっとうするところまでいかないうちに息切れ状態になってしまった。本稿は私の記憶のなかのミリアム・シルババーグ像ということで一応のまとまりがつくと思うので、このまま提出させていただく。本文は別の機会に譲りたいと思う。

★これらのテーマで書いた私自身の論考は、拙著『女性学の再創造』（ドメス出版 2002）を参照していただきたい。



ミリアム、ありがとう！

玉野井麻利子

ミリアムの医師団が彼女のライフ・サポートシステムをはずす、という日の数日前、私は朝早く彼女のいる病院にむかった。大声で話しかければ彼女の耳に届くかもしれない。でも他の人たちがいたらどうしよう、と思い、まだ町のさめやらぬ頃に彼女に最後のお別れを言いたかったのだ。幸い、病室にはもう深い眠りについたかにみえるミリアム以外、誰もいなかった。勇気を出してこう言った。

「ミリアム、テキストの読み方、教えてくれてほんとうにありがとう！ それから“本”の書き方色々教えてくれたよね。いつも私がこれ以上は先に進まない、と思っていた時、いつも肩を押してくれたよね。ほんとうに、ありがとう！」

思い返すと、私とミリアムの関係は常に純粹に「学問を通して」いたように思う。ひとつのエピソードを紹介しよう。彼女が(良性)脳腫瘍の手術を受けるという日の数日前、ミリアムは私のオフィスにやってきて、私の腕の中で泣き崩れたことがあった。私はこの手術のことを知っていたので、心の中で言うべきことを準備していた。ところが彼女はこれとは全く無関係なことを私に言ったのである。「近頃、日本の近代性について本を出したH教授、私の中野重治の本を全く引用していないのよ。何てことなの！」これにはわたしもびっくりしてしまって言葉を失ってしまったのである。

私は時に彼女との関係がどうしてこんなに学問一筋になってしまったものだろう、と考えることがある。そして思い出すのは1993年、私がここカリフォルニア大学ロス・アンジェルス校に赴任した時に交わした彼女との会話だ。「マリコ、あすブルーミング・デールのデパートに連れて行ってあげるよ！ 口紅の色を選んであげる！」私は実に無反応(!)であった。彼女はこれに懲りたのか、その後我々の関係は学問のみに落ち着いてしまったようだ。

そのかわり、ミリアムはこの非学問的関係を私の娘(当時小学校の五年生)に向けた。ところが娘もまだ口紅の色に興味がなかったので(20代に入った今もないのだけれど)、彼女との関係もまた学問的になってしまった。大学の入学試験の時など、娘の書いたエッセイをミリアムは何時間もかけて直してくれたそうである。彼女と娘とのランデブーの場所はたいていインターナショナル・パンケーキハウスというホットケーキ専門のファミリーレストランだった。初めて娘をこのレストランに連れていった時、私も夫もいっしょに昼食を食べるものと思いこんでいたのだ。ところがミリアムは「これは私と葉子とのデートなんだから、あなたたちは帰ってね」と言った。彼女はいつも、誰に対しても、常に真剣だった。そして常に寛大だった。自分の持っているすべてのものを、常にさらけ出してくれた。

こんなに寛大であった彼女、そしてこんなに早くいってしまった彼女に、私は何もお返しができなかったような気がする。



Miriam, We Love You

バーバラ佐藤

今夜、私もまた、麻利子(玉野井麻利子, Associate Professor, UCLA)とスタッフの方々、彼女の学生さんたち、娘の京子さん、そして、ミリアムのため、この追悼の式典を準備するのに奔走されたすべての方々に、感謝申し上げたいと思います。この計画に成美(中川成美)と私を含めて下さいましたことに感謝いたします。

私たちのそれぞれが、数え切れぬほどさまざまに、ミリアム(Miriam Rom Silverberg)のことを思い出します。私たちがここに集い、悲しみを、愉快的話を、そしてミリアムと彼女の輝ける才能への愛を共有することが、麻利子の尽力によって可能になりました。魂ということであれば、ミリアムは私たちの日常とは別の場所にいつもいるということになるでしょう。しかし、私たちのミリアムが、私たちの語るすべての言葉に耳を傾け、それらすべてを愛おしんでくれることに疑いはありません。

「ミリアムの友人たち」のみなさん—こう、あなたがたが愛情をこめてメールの題をつけてくださったように、そしてそれはミリアムに関するたくさんのファイルのひとつにしまいこまれているわけですが—あなたがたは私にとってだんだん親愛なるものになってきました。部屋を見回せば、あなたがたが誰であるかを認識するのに紹介の必要などありません。

赤いジャケットを見事に着こなしているソンドラ（ソンドラ・ヘイル(Sondra Hale, Professor, UCLA)）が、ミリアム自身と、彼女が色彩、気品、そして華麗さにたいして持っていた愛とを讃えます。

「ミリアムの友人たち」のみなさん、私もまたさいごの数か月を彼女とともにいたいと切に願っていました。しかし、ミリアムに残された日々をあたう限り心地よいものにすることができたのは、数の上でこそわずかではあったわけですが、あなたがただったのです。あなたがたは、ミリアムの反応を注意深く記録されました。あの目のちらつとした動きは何かのサインだったのかしら？彼女が流した涙は何かを伝えようとしていたのかしら？私は、「今になって思えば」という言葉は使いたくありません。しかし、学事のスケジュールに従うのではなく、直観に従って東京からロサンゼルスに飛び、この今ではなくてあのときに、ミリアムとあなたがたすべてとともに過ごさなかったことを後悔する気持ちを抱いていることは事実です。

ジム（James Fujii, Professor, UC Irvine）が細心に段取りを組んで、朝日が昇る時はだれがミリアムのそばにいて、日中は、そして夜の帳が下りたら誰がそばについているかを、みんなに知らせてくれたのでした。みなさんは、ご自身の毎日がいかに忙しかろうとも、スケジュールを調整して交替でそばについておられました。ミリアムの好きな音楽をあなたがたはかけられたわけですが、どんなに彼女の好みが他の人と違っていたことか、天のみぞ知るところです。アリス（Alice Wexler, Professor, UCLA）が2008年のアカデミー賞にチャンネルを合わせたとき、ミリアムはまどろんでいたのかもしれませんが。でも実際、彼女はその「派手さ」に見入り、テンポが緩くなってきたら「チャンネルを他に切り換えた」のでした。みなさんは賞賛のことばを期待されていたわけではないのですし、それらを欲しておられたのでもありません。しかし、なにものもミリアムの目を逃れることはできなかったということを感じておいていただきたい。ミリアムは、彼女だけが知り得たように、あなたがたがそばにいたことを知っていたのです。（ミリアム、言う必要もないでしょうが、ジムが今日どんなにこの場にいたいと願っていたことか。彼は私たちといっしょに参列する予定でしたが、ジョージ（James Fujiiのご尊父）の衰弱がすすみ、東京を離れられなくなったのです。）

私たちの友情が花開くずっと前、私はその分野におけるミリアムの業績についてはよく知っていましたし、それに畏れをなしてもいました。しかし、1998年、私がミリアムの隣に坐ったとき、彼女はシドニーで開催された「モダニズム、モダニティー、近代」シンポジウムにおける記念プログラムでのミリアムと寸分違わぬように感じられ、このとき私たちは絆を確かなものにしたのでした。

ミリアム、私がこの追悼式の日取りをまちがえてさえいなければ、カジ（佐藤一樹）と祥（息子）は私と一緒に参加したことでしょう。祥はあなたが喜ぶかもしれないと彼なりに考えたことをしました。彼はニューヨークのアパートメントで、亡くなった家族の栄光を讃える聖歌であるカディシュを歌いました。祥は、あなたに食事制限があるにもかかわらず、美香子さんの家の近くのレストランから、あなたの大好きだった「とんかつ」を届けさせるように手配したのだとも打ち明けてくれました。まこと、ミリアムは、佐藤家のなかに確かな存在を占めていたのです。とてもミリアムらしい、キャスター付きの鮮やかなブルーの旅行鞆は、私の母から彼女に遺贈されたカシミアのセーター、ロサンゼルス気候には適さない

二着のジャケット、「レンタル中」の靴、派手なピンクのポケットブック、そして知る人なき他の物たちと同様に、屋根裏で次に使われる機会を待っています。

私は日本から、ミリアムとだいたい週に一回ほど話をしました。ミリアムの話し方があまりにはっきりしなくて理解できないこともままありましたが、さいごの日々は一緒に過ごそうと、つまり、半年を「懐かしの国」（日本）で、もう半年をアメリカで過ごそうと決めたのでした。

今季節は秋、十月です。「十月の黄昏」について詠んだW・B・イエイツとも、私たちのまわりのものが枯れゆく秋というのとも違って、ミリアムの精神は私の心のなかで日々新たにされ、彼女の教え子たち—エリッサ (Elyssa Faison, Associate Professor, University of Oklahoma)、ジョナサン (Jonathan Hall, Professor, UC San Diego ジョナサン・ホール)、トッド (トッド・ヘンリー) —のなかで再生し、彼女の発表、著作、論文は、彼女の友情のうちに、彼女の生きることへの挺身のうちに甦ります。私はミリアムが美しい一枚の布だと考えるのが好きなのです。彼女は人生というタペストリを織りなす一本の生き生きとした糸でした。

ミリアムは生きるために懸命に闘いました。2005年に成蹊大学に滞在中、彼女の指の感覚の喪失はだんだんと悪化の一途を辿っていきました。薬物治療のため、美しい黒髪は失われ、特にシャワーから出たあとは、柔らかな巻き毛を残すのみになっていましたが、若い少女を思わせる瑕疵なき素肌は胸を打つほど美しいものでした。ミリアムは独立自尊の人で、他人にたよることをよしとはしませんでした。東京は渋谷の、ひしめき合う通りをかき分けるように歩いたとき、私が彼女の腕を強くつかみ過ぎてバランスを崩すというので、私はずっと叱られていました。ミリアムは何度も「ストリート」から涙ながらに電話をかけてきましたが、こうしたことのすべてから、若者であふれかえるところにいることの、最新のカラースクリーンの電子辞書をチェックしながらヨドバシカメラをみてまわることの、飽くことなく吉祥寺で毎日百円ショップへ出かけたときの、あるいはまた、人びとの写真を撮り、今もそのままに残っている元麻布のよく訪れた数少ない場所の写真を撮っているときの高揚感が滲み出していました。

ミリアムは豊かな人生を送りました。彼女の瞳目すべきバックグラウンドに注意を向けてみなければならないでしょう。ミリアムと私はともにユダヤの血を引いていますが、これが私たちを結びつけたもうひとつの共通項です。「懐かしの国」で人格形成期を過ごした子供のころ、彼女はユダヤ・コミュニティー・センターでの金曜の夜の礼拝にいつも出ていました。ミリアムの父親も研究者で、社会学者でしたが、国務省からの要請で日本に来て、ユダヤ・コミュニティー・センターを創設し、最初の代表を務めたひとりとして働いたのでした。ミリアムは来日中、金曜の夜にはシュール (シナゴグ) に行こうと主張しましたが、これは私たちのいずれかが熱心な信者だからというのではなく、彼女が自分のルーツを大事にしていたからなのでした。観念ではない幸せな記憶が、彼女を広尾の礼拝堂へと向かわせたのでした。彼女はさいごまで、何が正しくて何が間違っているかについての判断力を失ってはいませんでした。2003年にイラク戦争が始まる前、ミリアムと私はニューヨークでのアジアスタディーズ協会(AAS)の大会に参加していました。目の前にある危機的な問題を指摘しないパネルの話をお聴き代りに、ミリアムはデモをするため通りへと出て行きました。

ミリアムは人の娘でもありました。ある種の激しさをもって彼女は両親のことを敬慕して

いました。そしてまた彼女は daughter であり、aunt であり、いどこでもありました。彼女は多くの帽子をかぶりました。親戚の方が数名、今日私たちとともにいらっしゃいますが、同意して領いてくださることは私にとってよるこびです。彼女はみなさまがたのすべてについて語ったのです。

ミリアムは本当にさいごまで、彼女の母親であるジューンのそばにいました。大変な困難がありました。ミリアムは彼女を、ワシントンの長く住んだアパートメントから、ともに近くにいることのできるロサンゼルスへの移動させました。ミリアムはほとんど毎日そこを訪れました。ジューンを亡くしてのちミリアムの最後の来日のとき、立命館大学の成美（中川成美）と西正和が彼女をセミナーに招きました。それは明らかにミリアムのための舞台でしたが、彼女は私に参加するよう主張しました。そして当然のことながら、それはミリアムの舞台となりました。彼女は学生も教員も私も虜にしました。セミナールームは興奮に沸きかえりました。

セミナーのあと、ミリアムと私は、泊っていた京都のコープ・インに戻りました。私はジューンを偲んで何かしようと言いました。香典のかわりに、私がシルヴァーバーグ家の女性たちを上等な中華のディナーに招待することで話は決まりました。私たちはおなかいっぱいになってレストランをあとにしたのですが、ミリアムは、私たちはワイルドに生きなくてはいけない、そして、京都の百円ショップを東京のと較べてみなくては、と主張したのです。私たちは「おせんべい」を数袋、ジャンクフードをいくつかと、もちろんコーラも買ったのですが、コーラは部屋に戻ってラムと割って飲むためでした。

時計に目をやると、私が持ち時間をオーバーして話してしまったことは明らかですが、最後にまとめとして、もう一度くりかえさせてください。ミリアムは生まれながらにして教師であり、また学者として時代に遙か先駆けていました。時間は過ぎ去っても、私たちのミリアムをなくした喪失感まで持ち去ってはくれません。ミリアムの精神は日ごとに生まれかわっています。彼女はたぐいまれな人物でした。鶴のように、彼女は高く舞いました。残り続けるのはミリアムの学究だけではありません。ミリアムその人も残り続けます。彼女は私たちすべてにとってのインスピレーションなのです。

ミリアム、私たちはあなたを愛しています。

(翻訳：近藤康裕)



ミリアム：歴史家にして教師

クリスティン・デネヒー

私がミリアムの名前と研究を初めて知ったのは、ジョージタウン大学に在学中に私の指導教官だったジョン・ウィテック神父を通してだった。彼はミリアムの修士論文の審査委員をしており、ミリアムはフランツ・ファノンの作品を援用しつつ、1923年の関東大震災の際に起こった朝鮮人に対する暴力行為を考察していた。中野重治についての彼女の研究におけるように、文学テキストを歴史の分析のなかに組み入れる彼女の能力はひとつの特色であり、

彼は私ができることを理解するだろうことを知っていたのだ。UCLAでのミリアムの指導のもとで、私は日本現代史の複雑さ、とりわけ帝国主義と国家権力の性質の諸問題について目を開かされた。私が認めたひとつのことは、ミリアムが国家権力の歴史上の軌跡と私たちの日々の生活のなかにあるそうした権力関係の現代における名残りや現れのあいだの結びつきを強調することを決して恐れなかったことだ。私が学位論文「戦後日本における植民地朝鮮の記憶」を書いているあいだ、彼女は様々な歴史のアクター（朝鮮人知識人、日本の左翼知識人、元植民地官吏）自身の言葉を引用することで、彼ら自身をして自らを語らしめることを常に私を促した。詩やその他の文学テキストのニュアンスをとらえることができる彼女の能力は、綿密な解釈力と歴史上の文書のなかの証言としてのそれらの有効性を示すひとつの優れた事例だった。彼女は慣習にとらわれない原典の利用を勧め、学生たちに現代日本についての新しい問題を問うことを促す優れた師であった。彼女のもとでティーチング・アシスタントをしているとき、私は彼女が講堂をいっぱいにした学生を前にしてハロー・キティからセーラームーンや宝塚におよぶ話題を議論しつつ、現代日本概論のなかでジェンダー問題を取り上げるのを見た。人類学や文芸批評その他のアプローチを引き合いに出しつつ、ミリアムは伝統的な学問的境界に縛られず、学生たちにそうした人為的に引かれた境界線の外部に出ることを試みることで自らの地平を広げるように熱心に勧めた。創造的実験を常に励まし楽しんだミリアムに感謝を捧げたい。（翻訳：阿南順子）



ミリアム先生の思い出

エリサ・フェイソン

文化、労働、ジェンダー…ミリアム先生と幸運にも彼女の弟子となったわれわれにとって、これらは思想史の重大な要素である。ミリアム先生は、娯楽や遊びが重大問題であると信じ、女性、労働階級、植民地の人々の思想史は大衆文化を通して研究できると考え、文化史と思想史の区別を拒まれた。代わりに、大衆雑誌が、考現学者（モダンオロジスト）論文、帝国国家のイデオロギーや法律と共に検討されるべきであると主張された。また、お住まいになっていたロサンゼルス市の政治や文化生活に非常に興味を持たれ、通りの歴史、民族的混合、ロスを支える映画産業、その風景を圧倒するビルボードや広告のそれぞれに、日本の大正時代の考現学者が東京の文化生活を観察しドキュメント化しようとしたときのように目を留められた。

この文化史と思想史の区別の拒絶は、先生の教えるスタイルにも反映されていた。私は、1992年から就職するまでUCLAでミリアム先生に師事したが、先生に教えを受けることは先生の生活の一部にされることを意味した。先生からは、ゼミでだけではなく、レストランやカフェ、先生の家でダイエットコーラを飲んでお煎餅を食べながら学んだ。ミリアム先生は、ハリウッドやアメリカのテレビ、Jポップや、また彼女の若い時に人気があった寅さんの映画に夢中で、よく話は、山川菊栄がとりすましてモダンガールを非難したことから、

アメリカのテレビドラマのアリー・マクビール（1990年代に人気があった）の反フェミニズムへと途切れることなく移動した。

個人的にもアカデミックな生活にも、ミリアム先生は筋金いりのフェミニストで、ほかの女性の権利のために立ち上がった女性を称賛し尊敬されていた。そのフェミニスト意識、ユダヤ人としての文化遺産、そして日本で子供時代をすごしたアメリカ人としての経験が、先生のアイデンティティを形成し、研究の中で探究した知的問題にも大きく反映されていた。成人後は大半を病気と闘われ、最後の10年間は脳腫瘍やパーキンソン病の診断が生活の中心となり、障害研究に注目されるようになった。UCLA 女性研究センターのディレクターとして「障害に向き合うフェミニズム」という会議を主催された。先生がオバマ大統領の選出を目にされることができればとか、先生にもっと歴史や映画に関する質問をすることができればなどと思うが、いつまでも、先生に学んだこと、また先生を通してめぐり合えた人々を大切にしていきたいと思う。

（翻訳：安武留美）



普遍性の一断片—友人ミリアムを偲ぶ未完成原稿

..... グレゴリー・ヴァンダービルト

ミリアムさんが亡くなった後、助手の仕事をしていたときにアパートの研究室でたまたま見つけた未完成の英訳原稿を思い出しました。ミリアムの親友のジムさんに頼んで、最期の世話を担った従妹のヘレンさんに奇跡のようにミリアムの遺物のなかから見つけ出してもらいました。ミリアムのプライバシーを侵す恐れがありましたが、原稿のきれいにできるところをきれいにして、ミリアムを記念するために出版しようと決心して、がんばりました。一ヶ月ほどかかりましたが、結局、僕の能力以上になって、ミリアムの友人が編集しているインターネット雑誌に断られてしまいました。が、この遺作にも生きるということについて教えてもらいました。

この未完成翻訳は、藤田省三氏（1927—2003）の「或る喪失の経験—隠れん坊の精神史」というものです。『精神的考察』（みすず書房、1982年）に載せられているものですが、1981年、『子どもの館』という雑誌のため書かれたようです。1981年に、10年以上学界から亡命していた藤田が法政大学に帰ってきて、ミリアムがシカゴ大学の院生として青春の故郷の東京に戻ったところでした。2003年6月、藤田の偲ぶ会のために書いた追悼文でミリアムが藤田との出会いをこう語りました。

私には、藤田省三のすばやい身のこなしについて鮮烈な思い出があります。彼にはじめて会った時のことです。大原社研の所長だった二村一夫の研究室で、彼は突然、椅子の上に足を組んで座ってしまったのです。カール・ショースキーについて、また日本共産党の並外れた勇気と、この党が占領軍の農地改革政策のもとで置かれた皮肉な立場について興奮しながら語っている

最中のことでした。彼はこうして、椅子を「座布団」に変身させてしまったのでした。このゼミは河上肇の『貧困物語』から始まり、荒畑寒村の日記へ、『女人芸術』へ、さらに山田盛太郎や辻潤、ウィリアム・エンプソン、淡谷のり子へと進んで行きました。そうしてもちろんベンヤミンへも。歴史を生きることは勉強することそのものであり、そして勉強は生活と区別することができないということを学びました。(『みすず』510号、2003年10月)

勉強と生活、友情と仕事。そうして体の動きにも学ぶことができます。(有名なモダンガール論にも足の動きに目が引かれるとあったことを思い出します。)当時、日本でも英語圏でも紹介されたばかりのベンヤミンへの関心が藤田と共通していました。『Changing Song』には中野重治とベンヤミンが会ったことはありえないのに、同じ質問を聞いて、同じ近代を問うていたという印象的な結論が忘れられません。UCLAの院生として、僕はミリアムのゼミに参加したり、『Erotic Grotesque Nonsense』の雑役をしていたのですが、ミリアムと親しくなったきっかけは2000年の秋、同志社で研究するため京都に引っ越してから、ある夜、京都に来たミリアムから「Come and meet my friends」というミリアムらしい電話が入りました。京都の北部の岩倉地域にある屋敷にミリアムに会いに行きました。「論楽社」(論じることを楽しむ社のような場所)というところで、大人のための(無宗教)寺子屋のようなところに入りました。ミリアムと響きあった居場所だとすぐわかりました。創立者の虫賀宗博さんと上島聖好さん(当時夫妻)はミリアムより4年下で、学園紛争に残された乱雑のままの大学に入りました。卒業すると、藤田のような学者も、岩波の安江良介さんのようなジャーナリストも、ミリアムより数週間後に他界した岡部伊都子さんのような随筆家も、ハンセン病療養所の入園者も、有名無名の先生を探したり、講座を開いたり、小冊子を作ったりして、自分で意味を作ろうとしてきました。競争ばかりのアメリカ学界のものになってしまったミリアムにとって、こういう孤独の中から共同体(コミュニティ)を求めて生かすことは、冷たい清水のようだったと思います。僕にとってもあの夕は思想世界や友情世界への入口でもありました。

その京都の秋の夜以来、病院での言葉のない対面や別れもありました。藤田に一回しか会ったことがありませんし、2002年の秋、上島と一緒にお見舞いすることはミリアムは僕が友人か学生かという曖昧で反対の気持ちを表示したそうです。藤田は弱っていて生き残りつつありましたが、ハンナ・アーレントのことを話しました。ミリアムのゼミではじめてアーレントを読みましたので、結びついたと感じました。翌春、ミリアムがロサンゼルスからわざわざその中野区の病院に行きました。こういうふうに語りました。

最後に会ったとき、彼は私の手をしっかり握って、「帰れ」と言いました。

「帰って勉強をしろ、帰って仕事をしろ」ということだったのだと解釈しました。

この追悼のために、ミリアムがアーレントの「パーリアとしてのユダヤ人」論を探しました。院生時代、藤田に読ませてもらったそうで、20年後「パーリアとしての藤田省三」を問いました。「パーリアとしてミリアム」を考えるとアーレントに指摘された「力ない人々に自分を重ねる」、「文化の真の融合というものを実践する」、「反逆者としての責任を引き受ける人間」、それぞれにミリアムも描かれたでしょう。

それから5年後、あのカルヴァーシティ市の長期介護施設で、上島の自殺をミリアムに報

告しなければならぬ日、鬱というものと長く暮らしていた彼女が「Why?」と声がほとんど出ないのに言おうとしました。上島は「お休みどころ」（茨木のり子さんの詩から取ったことば）という名前で熊本県の山奥にもう一ヶ所の居場所を開こうとしました。詩人や芸術家などが大好きだったミリアムが「artists' colony」の種として応援しましたが、上島は山村の高齢化・無人化、男女関係の不信頼、現代若者の「明るい虚無」（彼女がパートナーにしようとした人の自己像）——つまりミリアムが直感によってわかった戦後日本の人々の歴史的孤独そのもの——を超えられず、自死を選びました。同じく2007年10月29日、太平洋のむこうにあったミリアムの病室で、詩篇第23篇もKaddishというユダヤ教の服喪者の祈りも覚えず、「南無阿弥陀仏」を二人で唱えて泣きました。その年の11月まではお見舞いに行くのとミリアムが少しでも良くなりそうでしたが、お正月過ぎにインドへ出かける前にお見舞いに行くのと眼が覚めなかったのです。2008年3月、アメリカへの帰りに熊本市内の上島家の墓にお参りしたとき、太平洋の向こうのミリアムが他界しました。

「隠れん坊の精神史」には藤田のキーアイデアが見えます。隠れん坊は「おとぎ話」の世界が体で動かして劇にされるプロセスで、こういう経験によって参加者が社会のメンバーになり、人間として成熟することができます。

こうしていずれも社会喪失の危機を経過することを通して相互的に回復と再生を獲得するという劇的過程をぼんやりと経験する。（鬼が）相手に勝つことは自分を救うだけでなく相手をも救うのであり、（隠れん坊）相手に敗けることは相手の勝利になるだけでなく自分の社会的勝利にもなるのであった。勝ち負けの一義的な二者択一を物の見事に取っ払った、この相互性の世界は私たちに何を思い出させるであろうか。

藤田にとって、高度成長によって自動車道路にあふれて隠れん坊のような遊びが不可能になったように、日本の人々にはこの可能性が失われてしまいました。何が残っているのか。鬼役の社会的死と再生が基礎となった信頼がなくなると共同生活はありえないでしょう。藤田はこういう予言的な断片を残しました。

ミリアムの勉強にも、ミリアムの生活にも、こういう可能性を探す予言的な声が聞こえます。障害をもっていたからかもしれませんが、こういう社会的相互信頼がまだ残っているようにミリアムは生活し勉強しました。知人や未知の人に迷惑をかける場合があり、裏切られる場合がありましたが、人の心が突然開く場合もありました。そうすると友情もありえます。不思議です。

ミリアムが亡くなって以来、藤田が尊敬して共鳴しあった E.M. フォースターのことばがよく思い浮かびます。If I had to choose between betraying my country and betraying my friend, I hope I should have the guts to betray my country.（「もし、国を裏切るか友人を裏切るか、どちらか一つを選ばなければならなかったら、国を裏切る根性がありますように」）ミリアムにこういう根性精神を学びました。感謝します。

2009年5月21日



シルバーバーグ先生との思い出

たけうちみちこ

私がシルバーバーグ先生に初めてお会いしたのは1999年の冬でした。私がUCLAの博士課程に入学を希望していたので、彼女の指導のもと研究したいと思いお会いに行きました。彼女は私の修士研究が占領期のパンパンガールであることと、アメリカで日本女性史先駆者であるシャロン・シーバースの生徒であったということで大いに興味をもってくださいました。私にUCLAに入学するために努力をなさい、そして実力をみせなさいと、彼女が次に教える20世紀日本女性史のクラスを取ることを勧めてくださいました。

シルバーバーグ先生の講義はとてもカリスマティックで刺激的でした。クラスでは100人くらいの生徒の前で私に修士論文を発表する機会を与えてくださいました。故・松井やよりさんがいらっしゃったときにはホームパーティーによんでくださり、松井さんと直接お話をする機会をつくって頂きました。(その後残念なことに、私が彼女に松井さんの死をお知らせすることになってしまったのですが。)まだ正規の生徒ではなかったのに、ホームパーティーに呼んでくださったお礼として、ポッキーなど日本のお菓子とハローキティのボールペンとノートを差し上げました。その時シルバーバーグ先生は日本の女子高生のような喋り方で「(お菓子は)太っちゃうからダメー。」とおっしゃいました。後に「実はあんまりキティちゃんとか好きじゃなかったんだけど、あれからはまっちゃったのよねえ。」とおっしゃり、ハローキティのトースターやテレビをみせてくれました。UCLAで行われたシルバーバーグ先生のメモリアルでたくさんの方々が彼女のキティちゃん好きのエピソードを話された時、私は心の中で「実は私のせいなのです……。」と恐縮しました。

シルバーバーグ先生は本当に楽しい笑い方をされる方でしたね?彼女が日本のドラマのロングバケーションをみているとおっしゃったので主題歌をまねて歌ったら「うまい、うまい!うっふふふふふふー!」と笑いました。先生は自分の分野の大衆文化だけでなく、日本の現在の大衆文化や流行もよくご存知でした。ある時は、「みちこ、スマップの新しいCD買っちゃったのよー。ウフ♥」と言い残し、私の友達のPh. D. Candidacy Qualification Exam会場に向かって行かれました。これから試験を受ける真剣な面持ちの友達と対照的だったのでよく覚えています。またある時、私の試験勉強の指導するために私を家に呼んだのに、「そうだ、サンタモニカで少年ナイフのコンサートがあるのよ。」とおっしゃり、一緒に出掛け、二人でずうずうしく楽屋に入って少年ナイフの方々とお話したことがあります。また、映画「Memoirs of a Geisha」を一緒に見に行ったら、「私、渡辺謙に似てる彼氏がいたのよ。」とおっしゃったので、私ともう一人の学生の羨望的になりました。最新の日本で流行している映画、ドラマ、漫画などは先生のお宅で拝見させて頂きました。そしてそれらはすでに先生の新しい論文のテキストになっているのでした。

シルバーバーグ先生は新しい学士の生徒、知らない人たちに「日本語しゃべれるの?」「日

本にいったことあるの？」と聞かれると、「I grew up in Japan!」とおっしゃいました。私はその質問をした人たちがびっくりする顔を見るのが大好きでした。

シルバーバーグ先生は学期始めに「Happy New Academic Year.」とおっしゃり、ハグして頬にキスしてくれました。先生にキスされるなんて生まれて初めての経験でした。学期が終わると、「An excellent, excellent paper!」と私のレポートをいつも褒めてくださいました。平均8年から10年かかる歴史の博士課程のなかで彼女のその言葉がどんなに励みになったことでしょうか。先学期、人類学の玉野井先生とシルバーバーグ先生の遺品の資料を整理していたら、日本女性学の資料の中に玉野井先生と私の名前のファイルがあり、私が提出したレポートたちを見つけました。こうやって私のレポートを取っておいてくださったのだと、とても胸が熱くなりました。先生が引退を決め、もう話す事もタイプすることもままならなくなった時にも、「私は絶対あなたの博士論文の監督者でいたい。Because your research is too interesting.」とおっしゃってくださいました。今でもつらい時はその言葉を思い出して励みにしています。

私が5年前に初めて講師をするときに不安がっていたら先生は、「あなたの一番の長所を使って教えればいいのよ。Use your humor!」とおっしゃってくださいました。冗談を言う私を不真面目と受け取られる先生もおられる中、「あなたのユーモアは長所なのよ、それは教えるのにとってもいいことなのよ。」とおっしゃってくださいました。先生はもちろんわかってらっしゃった。メッセージを伝えるのにユーモアはとても有益、そしてパワフルであるということ。

私が院生の学会で発表したときに、私のフレームワークに対してこういった批評を権威ある教授から頂いたと言ったら、先生もその教授の意見と一致するようなコメントを前におっしゃっていたのに、「それでなんて返したの？」とお聞きになったので、「そこには触れなかったです。」という、「You have to stand up for your beliefs!」とおっしゃいました。今、この言葉は私のアカデミア人生のモットーです。

シルバーバーグ先生の学者としてのご指導はとても厳しく、何度もくじけそうになりました。フィールドリサーチで学校の外に出て他の大学院生と話していても、シルバーバーグ先生が生徒達に課せる読む本の量と多岐にわたる分野に驚かれました。就職された先輩方が立派に堂々と仕事をこなしている姿をみる度、彼女の厳しいトレーニングをやりとげたという自信に満ちあふれているように思えました。フィールドリサーチにて、ワシントンDCで出会う日本からの学生運動世代の学者たちに一番驚かれたのは、「若い人で講座派・労農派の議論が一緒にできる人がいるなんて。」ということでした。「そういう事を誰が教えてるの？」と。「中野重治研究をされたミリアム・シルバーバーグ先生です。」と誇らしげに答えたものです。一昨年アートを書く機会を頂いたのですが、シルバーバーグ先生がいらっしゃってくれたらと、どんなに思ったことか。彼女だったら今どんなアドバイスをくださるのだろうか、彼女だったら今どういう風に解釈されるのだろうか？きっとまた誰も思いつかないようなことを考えられるのであろうな、と。

シルバーバーグ先生が集中治療室に入られたとお聞きした時は、私は日本でリサーチ中でした。その後先生にお会いしに行った時、先生が涙を流して喜んでくれました。そのお姿が忘れられません。先生も私もお互い泣き虫なのです。ですが、私が「今度アーティクルが出るんです。」と言ったとたんにつきがギラリとかわり、「私の生徒の名に恥じないものを書きなさいよ。」と目で語られました。(絶対そう!) 集中治療室にいようがいまいが、先生は変わらないな、と久しぶりにあの目でみられて身が引き締まる思いでした。

先生と最後にお会いしたのは、彼女のライフサポートを取る前日でした。一人で会いに行きました。しばらくすると彼女の従姉妹が現れ、「ミリアム、あなたの生徒のみちこが来てくれたよ。」とおっしゃいました。そうしたら、彼女の目にうっすらと涙がうかんできたのです。この時点で意識があるのかどうかわからなかったようですが、きっと私が会いにきたことをわかってくれたのであろう、と涙しました。

数日後、彼女が息を引き取ったと連絡がありました。あまりにも、あまりにも早過ぎる死です。

一度、先生は私におっしゃいました。「みちこはアンラッキーだった」と。なぜなら正規に入学した時に先生が脳腫瘍の手術、そしてその後パーキンソン病と判明し、先生の病気のため私の大学院生活が他の生徒達よりも長くなってしまったから、と。でも違うのですよ、先生。私はラッキーだったのですよ。あなたに指導される期間が長くなったのですから。泣き言を先輩方や他の指導教授の方々に聞いて頂くくらい厳しい指導でしたけれども、先生の学術的才能に惚れ込み、尊敬していました。

先生が私に教えてくれたフェミニスト歴史研究者として大事なことは何時も自分の信念を貫き、創造力と想像力を持つということ。シルバーバーグ先生、あなたの最後の生徒として誇りを持ち、あなたのように強い探究心を持ち、あなたの名に恥じぬように精進して行きます。あなたに少しでも近づいていけるように。

この手記を執筆中にうれしい知らせがありました。この秋からカリフォルニア州立大学ロングビーチ校で日本史を教える事になりました。シルバーバーグ先生は私が UCLA に入学した時から将来はもう一つの母校であるロングビーチで教えることを望んでいたという事をご存知でした。先生がいらっしゃったら、きっと「Excellent! Excellent! Michiko.」とおっしゃることでしょう。彼女の笑顔が目には浮かびます。

シルバーバーグ先生のかわりに、全米に散らばった先輩方が今回の就職活動を大変よくサポート・応援してくださいました。ここまでたどり着くまで、この号にも手記をよせておられる、玉野井先生、ノートヘルパー先生、ジムさんが数々の推薦状を書いてくださいました。シルバーバーグ先生にとって、彼女の残した生徒間にある絆、そして彼女の生徒への同僚・友人からの支援、これらの事柄が何よりも一番うれしいのではないのでしょうか。

新しい指導教授であるシャロン・トラウィーク教授が、私の UCLA での就職最終面接の一部である研究発表の練習を皆の前でする時に、「私はミリアムから素晴らしい生徒を授かってラッキーです。」とおっしゃいました。元指導教授であるロングビーチ校のシャロン・シーバース教授は「(この就職は) ミリアムがみちこの研究を良いと認めてくれたおかげだ。」とおっしゃいました。二人とも、シルバーバーグ先生を讃え、私の就職は彼女の私への指導の貢献が大きいと述べ、彼女に感謝することを忘れませんでした。そして私の就職は先生を通じて知り合った方々にも大変喜んで頂けました。「ミリアムも天国できっと喜んでいるよ」と。

6年前に AAS 学会で発表した際に、先輩の水野宏美さんが聞きに来てくださり、「I saw Miriam in you!」とおっしゃいました。私の発表の仕方がシルバーバーグ先生に似ていたそうです。その事をシルバーバーグ先生に言うと「そうなのよ、指導教授に似てくるのよ。」とおっしゃいました。私も宏美さんや他の先輩方にシルバーバーグ先生の面影を垣間みます。彼女の教えそして彼女の講義の仕方や仕草まで、私たち生徒の中にずっと生き続けてゆくことでしょう。

シルバーバーグ先生が私たち生徒に残してくれた沢山の物の中に、藤目ゆき先生をはじめとする日本で活躍されるフェミニストの方達との繋がりがあります。一番下っ端の私が言うのもなんですが、これからもよろしくお願い致します。私もアメリカのアカデミアでの日本女性史の発展に携わりながら、日本とアメリカの学者交流に貢献してゆきたいと思えます。シルバーバーグ先生がそうなさっていたように。

最後にシルバーバーグ先生の思い出を執筆させて頂く機会を与えてくださったアジア現代女性史ジャーナルの皆様へ感謝をこめて。

2009年3月



思い出

安武留美

私が、故ミリアム・シルバーバーグ先生にお会いしたのは、私が UCLA 歴史学部で大学院生活を始めたばかりの頃、学部主催の新入生歓迎のレセプションの場であった。先生は、私が日本人留学生であることを知るとすぐに「日本の歴史のなかでどの時代に一番興味を持つか」という質問をされた。私が「幕末または明治でしょうか……」と何気なく答えると、その理由はなぜなのか問いただされ、少々困惑したことを思い出す。大正・昭和時代のご研究が多いシルバーバーグ先生を納得させるのは非常に困難なことであったに違いないが、当時、アメリカ史を勉強するために留学した私は、日本史の知識のみならず興味も充分持っていな

かった。

その後、シルバーバーグ先生および先生の下に集まる研究者や学生の皆さんの影響であろうか、アメリカへ逆戻りであった私は、日本そしてアジアにも興味を持つようになった。私が UCLA の大学院に入ってから、シルバーバーグ先生がスタンフォード大学の研究員として UCLA をしばらく離れるまでの 3 年ほどの間に、私は先生のクラスを 2 つ履修した。その中のひとつのクラスの課題論文で日本での廃娼運動を取り上げたことがきっかけで、米国で売春撲滅運動も推進した女性組織—Woman's Christian Temperance Union—をテーマとして博士論文を書くことになった。シルバーバーグ先生のクラスは、多量な一次文献と難解な理論を読まされ授業中には名指しで質問が飛んでくる大変厳しいものであった。しかし、どんな資料、事象、話題でも研究対象として扱おうとする先生の斬新なアプローチは大変刺激的であり、専門の異なる歴史学専攻者のみならず、文学、人類学、社会学などを専攻する多様な国籍の学生たちが席を並べていた。また、ロサンゼルスという土地柄もあり、先生のもとには、日本からアメリカを訪れる様々な職業の知識人が立ち寄り、その方々を囲んで色々な会合が開かれていた。

留学生生活を始めて 1~2 年の間、外国留学生のほとんどいないアメリカ史専攻者たちの間ではなかなか居場所を見出せなかった私にとって、シルバーバーグ先生の周りに広がる日本語も通じる研究空間はオアシスのようでもあった。実際、先生のクラスを 2 つ履修したくらいでは、難解な理論を駆使して繰り広げられる議論には到底ついていけなかったが、それでも、時には聞き慣れた言葉で、少なくとも聞いたことはある人や事実について言及されるのを聞いていると、なぜかほっとすることができた。色々な国籍や専攻の学生たちが集まる、このシルバーバーグ先生を中心とする研究空間には、どのような背景を持っていようとも集まって来る人々を内包してくれるような大らかさがあったように記憶する。私が、思い出すだけでも胃の痛くなるような UCLA での最初の 3 年間でなんとか生き延びることが出来たのは、この空間で出会った人々からもらった友情と笑いに負うところが大きい。

その後、シルバーバーグ先生がスタンフォード大学の研究員として UCLA を留守にされたこともあり、先生とのつながりは少しずつ疎遠となってしまった。今から思うと、私が先生とゆっくりお話する最後の機会となったのは、ソーテル通りのお寿司屋で、楊秀珠（ヨン・サン・チュウ）さんと 3 人で夕食を共にした時のことである。楊さんが香港の大学に職を得たことを、私がやっとのことで分野の筆記試験をパスしたことを報告すると、シルバーバーグ先生はとても喜んでくださった。そして、10 年余りの月日が過ぎた 2007 年の夏、シルバーバーグ先生を訪ねたサンタモニカの病室で、私は、楊さんを始めその昔先生を通して知り合った友人たちにも再会した。私にとって、シルバーバーグ先生は、知識やインスピレーションと共に人間味あふれる多様な研究者たちとのつながりをもたらしてくれる師なのである。



シルバーク先生の思い出

水野宏美

ミリアムのメモリアル・サービスで述べた言葉を、「シルバーク先生の思い出」と題してここに記させてもらいたい。

ミリアムが亡くなって以来、いろんな人から彼女の思い出話を聞いた。エネルギーで、ユーモアに富んでいて、美術にも大衆テレビ番組にも政治にも精通したマルチ知識人なのに子どものように純粋にはしゃぐ、等々。私のはちょっと違う。私の学生時代の友人達は共感してくれると思うが、彼女のもとで大学院生だった私には、「シルバーク先生」はとにかく怖い存在だった。ゼミでは毎週、彼女の「What is the problematic here?」「What do you mean by that?」攻撃に冷や汗をかき、かといって何も言われないと逆に恐れが増した。たまに優しい言葉をかけられると、妙に戸惑った。もちろん、いつもしゃちほこぼっていたわけではない。ミリアムの最後の本『Erotic Grotesque Nonsense』の原稿の整理を手伝った一年は彼女のオフィスでいろんな話をした。それでも彼女が怖い存在だったのは変わらなかった。あの迫力の源は何だったのだろう。

忙しい彼女との時間を確保するために、学生達はみなそれぞれ役割のようなものがあったようだ。私は何故かいつもミリアムを空港に車で送る役だった。ゲートまで送って(9.11以前)、搭乗までの待ち時間に私の論文のコメントをもらう。彼女はいつもとても丁寧に学生の論文を読みコメントした。就職活動時に書くカヴァーレターを何度も何度も読み直し書き直したのも、LAXの空港でミリアムと行った作業だった。怖い先生から空港へ送って欲しいという電話があると、すぐに車を飛ばしたものだ。

ミネソタ大学での就職が決まり、自分も教授職についたとはいえ、彼女が怖い存在であることは変わらなかった。ある時、電話で連絡を頻繁にとらなければならないことがあった。ちょうど一人目の子が生まれ、本の執筆が進まなかった頃である。ミリアムは赤ちゃんがどうしているかよく尋ねてくれた。朝早く起きてきて困るので分厚いカーテンを作ろうと思うなどというくだらない話をしたら、次の電話でミリアムが「あの大切な仕事、終わったの?」と尋ねてくる。本の原稿のことだろうか、それとも何か頼まれたことがあったらどうかと、緊張して汗ばむ手で受話器を握りながら考えていると、「赤ちゃんの部屋のカーテン!」と思ってもみなかった返事が返って来た。家族生活を充実させるのが最優先だと力説するミリアムに、とても意外な感じがしたものだ。彼女がとても母親思いなこと、彼女の私生活がいつも幸せなときばかりではなかったこと、すでに体の不調を訴えていたことなど知っていても、ミリアムから仕事よりも私生活を優先しろと言われるとビックリした。それほど彼女は私にとって「怖い先生」だったのである。

娘が6ヶ月になった時、ミリアムに会わせたくて久しぶりにロスに戻った。人見知りをしたことの無い赤ちゃんなのだが、親のサブリミナルな緊張が伝わったのか、ミリアムの前では泣いた。戸惑ったミリアムは、キティーちゃんの顔の形の大きな枕を持って来てくれた。おみやげだと言う。顔を裏返すと枕がお昼寝セットに変身する、キュート&コンパクトの究極日本製品だ。ありがたく手に取ってよく見ると、犬の噛み跡がたくさんある。どう考えて

も、ミリアムの愛犬が使っていた枕に違いない。一人目の赤ちゃんの母親はたいてい清潔さに敏感である。それまでだらしく生活して来た私も、娘の使うものを日々熱湯消毒し、週に何回も床掃除をしていた。噛み跡のある枕を見て、正直とても戸惑った。娘の顔を見て、さらに戸惑った。しかし、怖い先生の好意を拒否するなど恐れ多くてできることではない。丁寧に敬礼を言って、ミネソタまで持って帰った。

それから4年間、娘は毎日このキティーちゃん枕で寝ている。もしかしたらミリアムのように鋭い分析力を持った、頭のいい子に育ってくれるかもしれない。ミリアムのように強い問題意識を持ったフェミニストに育ってくれるかもしれない。ミリアムのように母親孝行な娘になってくれるかもしれない。ミリアムが亡くなった3月は、私の母の一周忌でもあった。私の人生を形作った二人の女性が逝った3月は悲しい月である。しかし、メソメソばかりもしてられない。

娘の寝顔を見ながら、「What is the problematic?」という声が聞こえる（ような気がする）と鞭打たれたようにイソイソと仕事部屋に入る私である。



ミリアム・シルバーバーグとアメリカ、韓国に於ける朝鮮学研究

ジンキュン・リー

故ミリアム・シルバーバーグ教授と最初に知り合ったのは、私が UCLA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校) の大学院生だった頃、彼女のゼミを取ったことがきっかけです。その頃、1990年代の初期には、アメリカの大学で常勤の朝鮮学研究者を雇っていた東アジア研究学部はたいへん少数でした。大きな総合大学でも朝鮮学研究者のための新しいポジションが作られはじめたのは、1990年代の終わりから2000年以降でした。このように朝鮮研究が分野として確立していたとも言えない1990年の初期、ミリアム・シルバーバーグは、世界的視野から見て、また地域研究の対象として、朝鮮の歴史・文化の重要性を認識していた先見の明のある学者のひとりでした。UCLAでは、2007年に彼女が退職するまで、彼女の大学院生向けの近代日本史、日本文化ゼミは朝鮮研究専攻の院生たちの間でたいへん人気がありました。なぜなら、彼女のゼミを取ることによって、朝鮮研究に関するさまざまな問題を、日本、中国、西洋のモダニティーと歴史的に関連づけて再考察することができたからです。殊に若いフェミニストのアジア史、アジア文学研究者は、彼女の研究の方法に強く惹き付けられました。彼女たちは、ジェンダーとセクシュアリティを植民地、あるいは半植民地、帝国主義的モダニティー研究の中心に据えて考察するシルバーバーグ流アプローチを新鮮な驚きをもって学んだのです。私たち院生はゼミを通じて、また彼女の研究室の外の廊下で質問をするために列をつくって待っている間、知的交流をし、連帯の絆をつくっていきました。言うまでもなく、彼女の存在なしではこのように有意義な学者仲間の交流はなかったでしょう。こういうわけで、私たちの博士論文や本は、ミリアム・シルバーバーグ独特の「概念化」の方法の痕跡を留めているのです。

私がシルバーバーグ教授の研究が思っていたよりもさらに大きな影響力を持っていることを感じはじめたのは、大学院卒業後、アメリカから遠く離れた韓国で朝鮮文学を教えていた2000年頃でした。その頃、韓国の学界では、ジェンダーと植民地的モダニティーについての研究ブームとも言える現象が起こっていました。やっと大きく成長してきた韓国のフェミニズム、以前の研究に顕著であったナショナリスト的視点への批判、学界における国際交流（殊に、韓国、日本、アメリカ相互の交流）の活発化といった要因はこういった新しい研究の発展に貢献しました。こういった中で、ミリアム・シルバーバーグが韓国のフェミニスト研究者たちに与えた影響には、深いものがあつたと思います。シルバーバーグ教授の研究は、その他の要因と関連し合つて、韓国のフェミニストの学者たちを、今まで顧みられなかった史料の発掘へ、また、ジェンダー、階級、植民地的・帝国主義的近代、大衆文化などを関連させ、理論構築しなおす作業へと誘つていったのです。

教授の業績については、他にもお話したいこともあります。この短い稿では、アメリカと韓国に於ける朝鮮学研究への教授の貢献に限って要約して述べました。最後に、シルバーバーグ教授がまれにみる卓越した教師であつたことに言及したいと思います。彼女は、学生たちに、歴史的考察が素晴らしく知的高揚を促すものであること、ものを書くことが政治的な行動であること、まだ若い学者の卵でしかなかった私たちに、寛大な態度で、それぞれの研究分野でりっぱに貢献できることを教えてくれました。ミリアム・シルバーバーグは教師として、現在アメリカのさまざまな大学で教鞭を取り、朝鮮文学、文化、歴史を教えている学者たちの多くを育てました。今後育つてゆく世代の学者の方々にも、彼女の学者、教師としての精神を受け継いでいただき、共に発展させていくことができるよう心から願っています。

(翻訳：寺澤由紀)



感情労働者としての教授：ミリアム・シルバーバーグの場合

..... Chung, Haeng-ja (チョン・ヘンジャ)

私は、UCLA のキャンパスの南端から伸びるウェストウッド・ブルーバードの東側にミリアムが買ったマンションを訪ねたことが何度もある。ワークショップの参加者らとそこに泊めてもらったこともある。ロサンゼルスを東西に横切る二大目抜き通りのサンタモニカ・ブルーバードとウィルシャー・ブルーバードの間に位置する閑静な住宅街にあつたマンションのリビングルームは、天井が高く広々していた。しかし、大きなダイニングテーブルセットやソファ、テレビ、そして数々の本やビデオでいっぱいだった。視力の衰えを補うため、手狭になったリビングには、いつしか舞台上で使われるようなオレンジ色の背の高い電気スタンドが置かれるようになった。その煌煌としたライトで書類を照らしながら、眼鏡を鼻の半ばまでずらしたミリアムが、「この読み手は、私が言おうとしていることがよくわかってない！」と息巻いた姿が今も鮮明に記憶に残っている。というのも、筋肉の動きが悪く体力も

落ちてきたと心配していたが、気合いの入った怒り方にちょっとほっとしたのを覚えている。

ミリアムは、パーキンソン病によって体の動きがだんだん不自由になってくることを想定して、洋服の着脱を袖をくわえて助けたり床に落ちたものを拾ってくれる介護犬として、日本では珍しい大型プードルの雄をマンションで飼い始めた。バスターと名付け、子犬の時から飼い始めたものの、元気に走り回る立ち居振る舞いが子犬っぽいだけで、体の大きさは既に成犬だった。私がバスターと初めて対面したときに嬉しそうに飛びかかってきたバスターに押されて、私はよろけてしまったほどだ。

私の見た限りでは、バスターは体の動きを補助する介護犬としてよりも、ミリアムの心を癒した功績の方が大きいような気がする。「バスターは私の気持ちがわかるのよ。私が泣いているとそばに寄ってきて私の涙を必死で舌で拭ってくれるのよ」とミリアムが言っていた。ミリアムが自らの病のことや将来への不安を語りながら泣き出すと、バスターが駆け寄ってきて、困ったようにクンクン鳴きながら鼻先をミリアムの顔に近づけ必死でペロペロとミリアムの涙を拭おうとする姿を見たのも一度ではない。

2007年に、ミリアムが入院したロサンゼルス病院に見舞いに行ったとき、体の動きが不自由になってベッドに寝たきりになっていたミリアムの枕元からも見えるように、引き延ばされたバスターの写真が病室の棚の上に飾られていた。私がバスターとの思い出を語り始めると、パーキンソン病の進行によりほとんど無表情に見えたミリアムの目が笑ったようだった。

UCLAの歴史学部の教授であったミリアムは、私が2004年にUCLAの人類学部に提出した博士論文、*Performing Sex, Selling Heart: Korean Nightclub Hostesses in Japan* (『性労働と感情労働：日本のコリアンホステスたち』)の指導および審査をする委員会の学部外メンバーであった。「女給」や「日本の中のコリアン」に関する歴史的研究もしたことがあるミリアムは、女給の現代版ともいえる「ホステス」と「日本の中のコリアン女性」を、「感情労働」という理論概念で分析しようとする私のプロジェクトにも興味を持ってくれ、二人で議論したことも何度かあった。

「感情労働」は、カリフォルニア大学バークレー校の社会学者、アーリー・ホックシールドが、航空会社の客室乗務員への調査をもとに理論化の端緒を築いた。感情労働の簡略な定義は、自分の感情をコントロールし、相手の感情もマネッジすることだ (Hochschild 1983)。感情労働という概念は、社会学にとどまらず、女性学、経営学、心理学、教育学、人類学でも使われるようになっていく。こうした研究は、様々な職業や役割の中に埋め込まれて見えにくくなっている「感情労働」を可視可させ分析している (Guy et al. 2008, Steinberg et al. 1999)。そして、大学教授も「感情労働者」たりうると看破した論文も表れてきている (e.g., Zhang et al. 2008)。私にとってミリアムは「感情労働」を効果的に行った教授だった。

ミリアムは、学問的な内容だけでなく、学生である私の心の状態にも気を配ってくれた。私は2001年にフィールドワークから帰ってきた後、自分が集めたフィールドデータに圧倒され、博士論文の執筆は思うように進まなかった。自己嫌悪に陥り、更に書けなくなるという悪循環に陥ったことも一度や二度ではない。そんな私に「へんじゃ、私に毎週一回、博士論文のプログレスレポート（進捗報告書）をメールするっていうのはどう？」とミリアムが持ちかけてきた。プログレスレポートがどのように役に立つのか当初はピンとこなかったが、葉をもすがる思いだった私は、半信半疑でプログレスレポートなるものを書き始めた。博士論文執筆は孤独な長丁場の作業で、時には、羅針盤を失って大海原に放り出された小舟のように、自分がいったいどこに向かっているのかわからなくなる。プログレスレポートは、そうした「孤独」「方向感の喪失」「徒労感」といった鬱々としたネガティブな感情を、一週間に一度リセットするきっかけを作ってくれた。自分では一向に進んでいないと思っても、一週間、何をしたら書き出してみると、けっこう色々やっていることもわかった。そして誰かが、私の博士論文の進み具合を気にかけ、どんな状態にいるのかわかってきているという実感が、孤独感を和らげてくれた。既に病の影響でパソコンでタイプすることも容易でなかったミリアムからのコメントは最小限だったが、ミリアムは私に会った時、「でも、プログレスレポート、ちゃんと読んでるからね」と伝えてくれた。私には、その一言で十分だった。

面と向かって話す機会がある時は、学問的なことであれ、学問以外のことであれ、ミリアムと私は議論することがしばしばあった。ミリアムは私の言っていることに同意できないときには、はっきりそう言い、議論は継続する。私も同意できないときには反対意見を述べた。どちらの場合も、ミリアムから鋭い質問がとんでくることが多いのだが、私の答えに納得した時は、潔く「なるほど」と私の意見を受け入れてくれた。そうでなければ議論は継続である。また私のさまざまな質問や疑問にも、自分の経験を踏まえて真摯に答えてくれた。こうしたやりとりが、私のミリアムへの信頼のベースになっており、ミリアムが私にとって素晴らしい「コーチ」でもあった所以だ。

選手の心身の状態を把握し、アドバイスしたり、励ましたり、時にはしかったりしながら、選手が自分の能力を最大限引き出せるようにするのが理想的なコーチではないだろうか。コーチは選手の代わりに競技会に参加することはできないのと同様、博士論文執筆も、結局、大学院生自身が自分で書くしかない。方向を見失ったようなスランプ中の選手なり院生が、自ら、再び練習したり書いたりできるようにするのが、理想的な指導者であるが、そうある為には、選手や学生の心への配慮を忘れてはならない。

「コーチ」としてのミリアムは、プログレスレポートの一番の読者は私自身だということと、その心理的効用をよくわかっていたような気がする。つまり、悲観的になりがちな私が、プログレスレポートを書くことにより、「この一週間にできたこと、できなかったこと」を整理し、次に何をしたら良いかの指針になり、否定的思考から解放されるようにと考えていたのだろう。ミリアムは、日本史や女性学といった専門分野を教えるだけでなく、この学生には、どんなやり方が有効なのか、心を砕いて考えてくれていたような気がする。

ある詩人が「とても感情豊かだ」と感嘆したミリアム・シルバーバーグは、人間的な情感を持ちそれを表現しつつ、研究者としての頭脳明晰さを兼ね備えた希有な人だった。

研究と教育は、教授の大切な仕事であるが、往々にして専門分野を教えることだけが、大学や大学院での「教育」と思われがちである。しかし、「教えて育てる」のが教育なら、教えっぱなしでなく、育てているかにも気を配るべきではないだろうか。ミリアムは、研究と「教えて育てる」教育を実践していた、私にとってのロールモデルだ。

参考文献

Guy, Mary E., Sharon H. Mastracci, and Meredith A. Newman. 2008. *Emotional Labor: Putting the Service in Public Service*. Armonk: M. E. Sharpe.

Hochschild, Arlie. 1983. *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. Berkeley: University of California Press.

Steinberg, Ronnie J. and Deborah M. Figart eds. 1999. *Emotional Labor in the Service Economy*. Thousand Oaks: Sage.

Zhang, Qin Zhang and Weihong Zhu. 2008. "Exploring Emotion in Teaching: Emotional Labor, Burnout, and Satisfaction in Chinese Higher Education." *Communication Education* 57:1 (105-122)



ミリアム・シルバーバーグ氏を偲んで

中川成美

こうやってロスアンジェルスにやって来て、ミリアム・シルバーバーグさんの追悼会に出席していることが、いまだ現実感をともなって考えることができません。今年の2月から3月にかけての彼女の容態については、ここにいらっしゃるマイケル・マーラさんや玉野井麻里子さんから逐次うかがっておりました。その時に、彼女の最後に会いたいという気持ちと、変わってしまった彼女を見たくないという気持ちの両方が交錯して、複雑な気持ちになったことを覚えております。私の知っている限りでの日本でのミリアムの友人たちに連絡を取り、状況を知らせましたが、みな一様にどう考えていけばいいのかについてわからないままに、ただ状況を見守るしかないという気持ちを共有しました。

彼女の死を看取ることもなく、その気持ちを持続したままに本日ここに立ったわけです。

彼女との交遊が始まりましたのは何時であったかが実ははっきりしません。「Changing Song」という卓抜した中野重治論を書いた研究者としてはその本が出た時から知っておりました。たまたま、私の友人の林淑美さんたちが翻訳することになって、そのわずかなお手伝いをしたことから、彼女とやりとりを始めたのではないかと思いますが、実物の彼女に出会ったのは、1996年か1997年のAASではなかったかと思えます。その後、1998年11月2日から4日迄立命館大学国際言語文化研究所の10周年記念の国際シンポジウムに海外ゲスト

ト・スピーカーとして、トリン・ミンハさん、ギアン・プラカーシュさんなどとともに来日された時、一緒にシンポジウムを過ごし、親しくなっていました。ミリアムさんと私はほぼ同じ年齢で、同じ世代をすごした共通感が、あまり時間をかけずに仲良くできた原因ではなかったかと思います。簡単にいってしまえば、「気があった」ということになります。この会議は「21 世紀的世界と多言語・多文化主義—周辺からの遠近法—」と題されたものですが、その概要は現在「20 世紀をいかに越えるか—多言語・多文化主義を手がかりにして」(平凡社・2000 年) になっていますが、残念なことにミリアムの論文は収められておりません。なぜなら、このときのミリアムの発表は最後の著作となった「エロティック・グロテスク・ナンセンス」の骨子となるものであり、日本語とはいえまとめるまえに発表はしたくないということで、私たちは収録をあきらめました。このときのすぐれた発表と、ユーモアにあふれた彼女の生き生きとしたすがたが思い出されます。思えば、この前世紀末に行われた会議での予測は半分は当たり、半分は失われてしまいました。あたったのは暗い植民地主義的思考から継続する戦争の予測であり、失われたのはそれを克服する希望です。

私がアメリカに行く時や、彼女が日本に来るときには必ず会っていました。ミリアムの美質の最たることは、率直であることですが、会ったとたんにもすぐ核心の話から始められるのは、私にとって大変楽でした。また、彼女が来日したときには、日本滞在時のたくさんの幼な馴染みの友人たちに囲まれて、とても幸せそうで、また彼女のことを大事に思う多くの友人たちがいることに、私まで嬉しくなりました。

2002 年から 2003 年にかけて私はスタンフォード大学で教えていたのですが、このときも彼女がサンフランシスコに来てくれたり、私もマイケル・ボーダッシュさんが UCLA の研究会に呼んでくださったりで、行き来しました。電話、メールはもちろん、頻繁にかわしました。いま、思えば徐々に手が動かなくなってメールが面倒臭くなってきたのではないかと思います。電話は本当に好きでした。

そのときに生涯忘れられないことに彼女と、私の家族との 3 人のラスベガスへの旅があります。彼女は UCLA 出版との本の打ち合わせでサンフランシスコに来ることは事前から約束していました。米山リサさんとタック・藤本さん夫妻もその時スタンフォードに滞在中で一緒に会いませんかなどと話していたのですが、突然に電話でミリアムが「出版の話がうまくいったから、お祝いしないか」と言ってきました。勿論ということで、パロ・アルトかサンフランシスコでセティングしようとして申し出たところ、「いや、私はラスベガスに行きたい」と言い出したのです。ちょっと、状況をつかみかねて「どうして?」と聞きましたら、「理由は無い。行きたいから行くの」という答えでした。実は私はラスベガスの俗悪さは聞いており、もっとも行きたくない町の一つでした。

さて、どうしようかと友人たちにも相談したのですが、明日には出発という予定はあまりに無茶でした。ただ、私はサバティカルの最中で、もう少しで日本に帰るところで身軽ではありました。そしておりしも 2003 年 3 月 19 日で、もう少しであの忌まわしいイラク戦争が始まる前夜でした。この時期に一人ではいたくないという気持ちから彼女と行くことにしました。至急に 3 人分のホテルをとり、自分たちの航空券をとりと大忙しで準備して、ラスベガスの空港で彼女と待ち合わせました。にこにこしながら彼女と出会い、早速にホテル・パリスに入りました。しかし、結局は部屋で一日中、テレビで戦争が始まる瞬間を見続けました。彼女がブッシュの顔を見ながら「変な顔、目が小さいね」といったときには深刻

な状況にも関わらず一同、爆笑でした。刻々と迫りくる戦争の瞬間というのは恐怖です。しかし、ミリアムはユーモアと叡智で切り抜けてくれました。

おいしいものも食べ、小さな賭けもして、すっかりくつろいでこの小さな旅は終わったのですが、帰りの空港で、また得難い体験をしました。ミリアムはその時、やはり記憶力が落ちていたのか、帰りの航空会社をまちがっていて、違う航空会社のカウンターにいてしまい、乗客名簿に名前がないことを知らされました。その時に感動したのは、彼女の行動力です。少しの迷いもなく、すぐに高額な航空券を購入して、いとも優雅に職員に車いすをもって来るように命令して、女王様のようにゲートにはいりました。私たちの出発時間は違っていたので、大混雑のバーにはいって飲み物を注文したのですが、一向に注文にもきません。ようやく来た時には出発時間がかなり迫ってきていました。それでも尽きない話を一生懸命に続けていましたら、(ともかく戦争が始まってしまっていましたから話すことはたくさんありました)、もう搭乗時間ぎりぎりでした。会計をいくら頼んでも、ウェイターは来ません。お金をおいていこうかとメニューを見ましたら、ミリアムの頼んだのはメニューにないものでした。さて、どうしようと困っていたら、ミリアムが「逃げよう」と車いすから立ちあがったのです。車椅子を放り出して、私たちは笑いをこらえながら店を出ました。少し、小走りにいったところで、全員たちどまり、本当に大笑いしました。飲み逃げという初めての犯罪をおかした、この一行はなぜこれがこんなにおかしいかをよくわからないままに笑いつづけて、ゲートへと走りました。そうです、ミリアムも走っていたのです。

いま、このことを思い出すとおそらくはずっと優等生で生きてきたミリアムが初めて子供のようないたずらをしたことの解放感、想像にあまるほどのことではなかったかと思えます。そして、私もまたこの不思議な犯罪体験をいつも思い出すたびに、懐かしく貴重に思えてならないのです。ですから、いつか自分の生が終わるころにあのラスベガスの空港に行つて、ミリアムと私たちの飲み物代を、あのバーにそっと置いてきたいとも思えます。それまで私たちの自由な認識という空間が保障されたことへの感謝として。

数限りないミリアムとの思い出は、私の貴重な財産です。誰にもわたすことのないこの思い出を、皆さんとわかちあうことで、ミリアムへの追悼としたいと思えます。今日はまりこさんはじめ、UCLAの方たちの会のご準備、また呼んでくださいましたことをこころから感謝申し上げます。また、こうやってミリアムを軸とする友人たちの温かい心に触れることができ、殺伐たる日本の現実に生きる私にとって得難い時間となりました、これもお礼もうしあげます。最後にここに来れなかった多くの日本の友人、林淑美、西川長夫、鶴見俊輔、西成彦、保科孝夫、実吉利彦、木村美和子、瀧澤武、佐俣秀樹さんたちからの深い哀悼の意をお伝えしたいと思います。

ミリアムの笑顔が浮かびます。

(2008年10月3日UCLA・ロイスホールでのミリアム追悼会でのスピーチから)



ミリアム・シルバーバーグの思い出

寺澤由紀

私がミリアム・シルバーバーグと密に接していたのは、1990年代の前半の数年間、彼女がアメリカ東部のリベラル・アーツの大学からUCLAに移動してきて間もない頃だった。都会に引っ越して来れたのがとてもうれしそうで、ロサンゼルスでの生活を水を得た魚のように楽しんでた。この頃に出た彼女の一冊目の本は、中野重治の「転向」を新しい角度から論じたものであったが、日本研究の分野で高い評価を受け、権威ある賞を受けた。自らの博士論文を基にしたこの本を出版した後、彼女は、この時期の新しいトレンドであったカルチュラル・ヒストリーの方法や、従来の「女性史」研究とは違う「ジェンダー」研究に興味を持つようになる。^注 また同時に、人種・民族をめぐる理論や植民地研究を視野に入れ、カルチュラル・ヒストリーのなかでも大衆文化、ビジュアルな表象を分析の対象とする研究のやり方は、私たち大学院生にとってもたいへん魅力的で、刺激的なものであった。当時は、近現代日本史以外にも、中国史、朝鮮史、東アジア各国の文学・映画研究専攻の大学院生が彼女のまわりを集まってきて、ゼミ、勉強会、学会などみんなで積極的に参加したり、催したりした。

彼女がユダヤ系であったことは、彼女が研究をすすめていく上でも、プライベートな生活の中でも、大事な要素だったと思う。彼女にはユダヤ教のシナゴグに定期的に行くような深い信仰心はなく、どちらかというと宗教にそれほど関心がない人であったようだ。しかし、ユダヤ系アメリカ人の文化の伝統は引き継いでいて、私が大学院一年目の12月に、ユダヤ教のお祭りのハヌカのパーティーを大々的に開いて私も呼ばれた。彼女にとってはクリスマス・イブやクリスマスは関係ないらしく、その間ずっと研究の仕事をしていた。それを見て私は、「多文化共存のアメリカ」を間近に感じたのであった。もともとユダヤ系アメリカ人の食べものであるベーグルというパンを売っているお店にもうるさくて、家の近くにベーグル屋があつてまあまあおいしいのだけど、本格的 (authentic) というにはちょっと、ふわふわ (fluffy) しすぎている、などと言っていた。それから、キュウリのピクルスは、「ハーフ・ディル (中くらいに浸けた歯ごたえのあるやつ)」を買うのがこつ、などということも教わった。食べもの話ばかりだが、彼女は人生を楽しむことを知っていた人で、食べる事も、おしゃれも、友達関係も、おそらく恋も精力的に楽しもうとしていたのだと思う。パーキンソン病を患っていた晩年にも、リハビリのために滞在していた老人ホームに、新鮮でおいしい蟹料理をデリバリーでとって、ホームでの友人やわたしに盛大にふるまってくれたりした。

彼女の生い立ちを聞くと、アメリカ国務省の外交官の娘として東京で育ったそうで、ティ

^注ちなみに、1990年代の終わり頃から2000年代にかけては、「ジェンダー」ではなく「女性」に焦点を当てた研究方法が再度見直されてくるが、このニューウェーブは、シルバーバーグ教授の業績とは直接関係がない。

ーンエージャーの頃の日本での思い出には、結構つらいこともあったらしい。うわさによると、はっとするほど可憐で美しい娘時代の写真が残っているというが、彼女は日本で若い時「化けものって言われてた」とぼろっと私にこぼしたことがある。背の高い「ガイジン」の娘が、1960年代の日本で、どういう差別やいじめに会ったのか、今となっては知る由もないが、「異分子」として疎外された経験によって、彼女が心の傷を負ったことは確かであると思う。そして、この原体験とユダヤ人としてのアイデンティティが、後に、修士論文で、関東大震災時の朝鮮人虐殺をテーマとして取り上げることにつながり、さらに、人種・ジェンダー・階級をめぐるポリティクス研究へと発展したのではないだろうか。また、子どもの頃につらい経験をしたからこそ、情の細かい人になったのかもしれない。友人や教え子の学生、院生に対しても同情心が篤く、やさしく接することも多かったが、反面、激しい感情をぶつけられることもあり、私にとっては、「すごくやさしくて、すごく難しい人」だったと言えるかもしれない。

それから、今も忘れられないパーティーの思い出があるのでそれも書いておきたい。まだノーベル賞を受賞する前であったが、大江健三郎がUCLAにゲストスピーカーとして招かれたことがあった。大江さんは、戦争と自身の子どもの時代の体験をポエティックに語り、シルバーバーグ教授と言語学専攻の院生の通訳を通して聴いたUCLAの学生にも大好評だった。講演のあった日の夜、彼女は、自分の院生を「特別作業班 (task force)」として「編成」して、料理やその他の準備に当たらせ、自身采配を奮って、自宅でホーム・パーティーを開いた。メニューは、オレンジ・チキン、タブーリ (中東料理のサラダ)、その他アペタイザー、そして、シルバーバーグ教授曰く「エレガントなデザート」、苺のチョコレートフォンデュであった。UCLAその他の大学の著名な教授陣や、院生や、また彼女の個人的な友人も招待されており、国籍も、人種も、年齢も、研究テーマもさまざまな研究者の気の置けない集まりだった。英語、韓国語、日本語と多様な言葉が飛び交い、それでいてリラックスした雰囲気、しかも知的な刺激にあふれていた。宴もたけなわになった頃、大江さんは、朝鮮の伝統舞踊を披露され、私の横で見ていたコリアン・アメリカンの友人は、「彼は踊りのリズムを完璧にマスターしているわ」と絶賛した。夜更けまで続いたパーティーは楽しかったが、シルバーバーグ教授のお宅は、わりとふつうのアパート・ビルの二階の一角にあったので、当然ながら、下の人が「うるさい」と怒鳴り込んで来てしまった。しかしその後も、結局宴も踊りもやめることもなく、ただ、朝鮮伝統舞踊のハイライトの足踏みのところだけ、「軽く」踏むことにして続いたのだった。それから階下の住人も二度と文句を言いに来なかったことを考えると、一夜限りだと観念してあきらめたのだろうか。次の日、シルバーバーグ教授は、ロサンゼルス大暴動後の爪痕をいまだ深く残すロスの町を、大江さんの後学のためにと朝早くから彼を車に乗せて案内し、日本行きフライトに間に合うように飛行場へと急いで向かったそうだ。

この時の思い出は、シルバーバーグ教授に関しての数多くのエピソードのなかでも、私の中で燦然としている。彼女のセンスのよさ、ウィットとユーモア、ホスピタリティ、さまざまな人に対するオープンな態度、研究に対する真剣さ、人種差別や貧困その他の社会問題に対する関心、さらに、度胸がすわっているところなど、どの点でも最高に素敵だった。短く激しく燃え尽きたような彼女の人生であったが、素晴らしく幸せな瞬間が何度もあったに違いない。その輝いていた時の片鱗を共有できたことは、わたしにとってかけがえのないこと

だったと言えるかも知れない。



ミリアムさんとやよりさん

大越愛子

ここ一年間、日本軍性奴隷制を裁く「女性国際戦犯法廷」(以下「法廷」)の意義と「法廷」を構想した松井やよりさんの足跡について考え続けている。彼女のフェミニスト・アクティビストとしてのすごさは、その生前中にも事あるごとに感じてはいたものの、身近におられる安心感からか、やはり十分には理解できていなかったと思う。

2002年12月にやよりさんが早すぎる死で、その意義深い人生を終えられた後、彼女の思い出を『女性・戦争・人権』第六号で特集したが、そこに寄稿してくださった中の一人が、ミリアム・シルバーパークさんだった。その時の追悼文の多くは、やよりさんの個人的思い出が多かったが、ミリアムさんの文は、やよりさんの成し遂げた仕事の世界的意義を端的に指摘されていて、感銘深いものだった。その冒頭の一部と締めくくりをここで紹介したい。

「女たちが集い、また男たちも集わん。松井やよりさんの思い出を胸に、人々は集うことでしょう。それは、松井さんが創設に貢献した共同体が、ハルモニたちの歴史の証言者として、東京にまたハーグに集まったときのように。それは、200名を超えるUCLAの関係者が、松井さんによる東京法廷の報告を聴きに集まったときのように。ロサンゼルス聴衆には、ジェンダーの不公平性を研究する学者のほか、アジアの各地域を研究する学生、教授が集い、その範囲はまさに大日本帝国の勢力範囲におよぶものでした。」

「戦争の足音が聞こえるここアメリカ合衆国にあって、ジャーナリスト、著述家、フェミニスト、地球市民、そして、友人、松井やよりが残したもっとも大事なメッセージを、わたくしは、今、これまでになく、認識しております。それは、われわれは過去に対して責任があるように未来に対しても責任がある、という彼女の信念です。」

私がミリアムさんと初めてお会いしたのは、確か「法廷」の二日目だった。彼女の方から声をかけてくださったのだが、日本文学研究者として私の日本文化批判、仏教批判に関心をもっていると言われて恐縮したのを覚えている。

追悼文でミリアムさんが指摘してくださったように、「法廷」は、松井さんが創設に貢献した、新しく誕生した開かれた共同体だった。共同体といっても画一的なものではなく、各地域の被害女性たち、支援者たち、そして加害国日本の女性たち、加害の証言を志した元兵士、国際法に詳しくかつ従来のものを越えた法を創設することに意欲的な国際的な法律専門家たち、国境を越えて集まったフェミニスト、アクティヴィスト、ジャーナリスト、研究者、さまざまな形態のボランティア、警備を買って出た活動家など、まさに種々雑多な人々が、「日本軍性奴隷制の被害実態を明らかにし、加害者を裁く」という目的に向けて結集したの

だ。その中にミリアムさんも、私もいた。

判決を聴いた時のミリアムさんの感動は強いものであり、その場で彼女が「この判決には critical race theory が取り入れられている」と言われたことが印象的だった。彼女は、「法廷」が過去の被害と加害の実態を暴き、それを裁くのみならず、さらに普遍的な観点で、被差別の女性に対する暴力を自然視していた近代から現代に至る植民地主義、家父長制、国家ナショナリズムなどの構造的暴力を裁くものであることを指摘されたのである。

それは、1990年代に日本の戦争責任が厳しく告発された時、「女性のためのアジア平和国民基金」(以下「国民基金」)の創設で責任回避をした日本政府や右翼ナショナリズムの興隆に対して、「ジェンダー正義」「植民地主義の総決算」「家父長制暴力撤廃」という普遍的観点から、世界の女性運動と連帯した「法廷」を構想し、実現したやよりさんの志と深く共振したものであったに違いない。ミリアムさんは当時から、この画期的な「法廷」に対するすさまじいバックラッシュを危惧されており、それに負けないためにと「法廷」を世界に紹介する活動に精力的に取り組まれた。

そうした活動の一環として藤目ゆきさん、北原恵さんとともに、私をもUCLAに招いてくださったのは、2003年5月だった。アフガン戦争が始まっており、空港のチェックも厳しく、靴を脱がされ、尋問されたことが腹立たしかったのを思い出す。アメリカで「愛国法」が施行され、ミリアムさんの危機意識は強烈だった。彼女が、西海岸でもユダヤ人差別をはじめとする人種差別は依然として根強いと言われたことを記憶している。

私たちがロサンゼルスに到着した夜、UCLAでアルハンディ・ロイの講演と反戦集会があった。ミリアムさんが誘ってくださって、私たちも聴衆に加わった。白いドレスを着たロイがカリスマ的で、学生たちや大学関係者の反戦の熱気は感じとれたが、やはり少数派だったことは否めない。

そんな時代だからこそ、松井やよりさんの構造的暴力との闘いというメッセージが必要だとミリアムさんは思われたのだろう。UCLAの一角の中くらいの部屋で、私たちは各自の論点から日本の状況を発表した。私は日本の思想的文脈の中から、内向きの内面的な悪を追及はするものの、公的な責任を回避する傾向がむしろ正当化されてきた系譜と、それを打破する女性運動の意義について論じた。藤目さんのアジア女性史からの論点、パワーポイントを縦横に使った北原さんの日本の天皇制をビジュアル・イメージで解説する発表も好評で、熱心な質疑応答があったと記憶している。とはいえ、忘れていること、思い違いもありうるので、ぜひ指摘していただきたい。

楽しかった思い出としては、三人でミリアムさんの自宅に泊めていただいたのだが、夜遅くまで飲みながら色んなテーマで議論したことがある。確か私が酔っぱらって赤ワインのボトルを倒してしまい、大騒ぎしたこと。ミリアムさんはその頃すでにお酒を控えておられたが、そんな私たちをニコニコと受けて入れてくださったっけ。

ミリアムさんは、日本で育った時期の思い出、日本の文学や思想への思い入れ、そして日本の女性運動の軌跡や、やよりさんとの出会いなど色々語ってくださった。辛辣な日本批判もあったが、「法廷」を実現したアジアの女性運動を高く評価されていたと思う。

ロスアンゼルスにいたのは短期間であったが、その間にミルズ大学で全米の女性学の研究集会があり、ミリアムさんの薦めもあって、私たち三人も参加した。そこでアフガン戦争に

賛成したNOWの幹部が来ていて、彼女の報告に対して、イラクからの留学生が激しく批判し、議論が熱く盛り上がる場面があった。私たちが作ったブッシュのアフガン攻撃反対のピラを、発表者の一人サスキア・サッセンに渡して賛同を得たのも懐かしい。

滞在期間中、ミリアムさんの自宅で、ゼミナールの特別授業が開かれ、私たちも参加した。確か「ちびまるこちゃん」に見られる日本の家族関係がテーマで、学生からのまる子ちゃんのおかあさんが何故いつもイライラしているのかという質問に対して、日本の家族のあり方、性別役割分業、固定的な親子関係などへと議論を深めていかれる手法に感心した。その後は学生に混ざってのホーム・パーティで、おおいに盛り上がり楽しかった。

充実した日々を過ごした後別れの時が来たが、今後の研究のネットワークを固く約束した。その後、藤目さんが「アジア女性史」をテーマに科研をとってくださり、来日したミリアムさんと藤目さん宅で久しぶりにお会いした。私はアジアに関わった日本のフェミニストの軌跡、特に松井やよりさんや中原道子さんなど「法廷」に関わった方たちの思想の軌跡を跡づけたいというプランを提示して、お二人から賛同を得た。

今から思えば、それがミリアムさんとの最後の出会いだった。私は彼女たちに誓った松井やより論をまとめたいたいと思いながら、なかなか論点を絞りきれなかったが、昨今のネオ・リベラリズムの暴走とそれによって世界が壊滅的打撃を受けたことを実感するにつれて、改めてやよりさんが闘ってきたものの正体が鮮明になってきた気がする。

彼女は日本の天皇制に体现される封建的な社会システムのみならず、それが延命のためにしがみついた新しいイデオロギー、いわゆるネオ・リベラリズムの巧妙な構造的搾取体制の浸透を、アジアの女性たちの取材現場から鋭く感じ取り、それに対する警告を70年代から発し続けていた。当時衰退しつつあるマルクス主義に代わる新しい思想の登場と、大半の研究者やメディアが賞揚したネオ・リベラリズムの「個人の自由」絶対化がもたらす自己決定・自己責任原則のトリックを、彼女はすでに暴いていた。その先駆性に今更ながら感服する。

やよりさんは、90年代後半に現れた日本の戦争責任を隠蔽する様々な言説、単なる右翼ナショナリズムのみならず、いわゆる良心的知識人による「国民基金」擁護も、構造的暴力を問題にせずして、被害者個人の救済にのみ問題を還元する点で、まさにネオ・リベラリズム言説であることを見抜き、それを乗り越えるために「法廷」を構想されたのだ。

ミリアムさんは、そうしたやよりさんの世界的視野の中のネオ・リベ批判を高く評価されていた。やよりさんがアジアでえぐり出したネオ・リベ経済システムの構造的搾取が、ブッシュ大統領下のアメリカで猛威をふるう状況を、ミリアムさんは如実に感じ取られていたのだと思う。そして、やよりさんもミリアムさんも、ネオ・リベラリズムの末路を既に予見されていたに違いない。

ここでミリアムさんからやよりさんに贈られた言葉を、今一度かみしめたい。

「われわれは過去に対して責任があるように、未来に対しても責任がある」。

私たちは過去に帝国主義経済で破壊された世界を再建するために、軍事主義が興隆した時代を知っている。その責任を未だ果たすことがないままに、過ちを再び回復しようとする動きが見える。その過ちを繰り返さないことに関しては、私たちも未来に責任があることを再確認し、非力ながら、やよりさん、ミリアムさんの志を継承していきたいと思う。